

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

E.ヴァレーズにおける政治的前衛と芸術的前衛の結合(1)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2003-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/820

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



E. ヴァレーズにおける政治的前衛と芸術的前衛の結合（1）

沼野雄司

0) ヴァレーズをめぐる新たな問題系と本論文の射程

- 1) ニューヨーク時代のヴァレーズ
- 2) 両大戦間のアメリカにおける社会主義
- 3) ヴァレーズの音楽活動と彼をめぐる人脈
- 4) 政治的前衛と音楽的前衛の結合？

0) ヴァレーズをめぐる新たな問題系と本論文の射程

エドガー・ヴァレーズ (Edgard Varèse 1883-1965) は、フランスに生まれ、パリやベルリンで頭角をあらわした後にアメリカで活躍した作曲家である。一般に、ヴァレーズの音楽史的な評価は、西洋音楽史上初めて打楽器のみによる作品《イオニザシオン》を作曲したこと、そして50年代に電子音楽やミュージク・コンクレートの可能性を探求したことに集約されている。楽音／騒音の垣根を取り払った「音響の組織者」、そして突如アメリカにあらわれた「早すぎた前衛」といったあたりが、最もよく彼に与えられる称号であろう。第二次大戦後間もない時期に、ヴァレーズの音楽が若い作曲家たちに熱狂的に支持されたのは、既に1920年代において、しかもアメリカという「辺境」の地において、ドライな音響体が空間移動を重ねる独特の表現に到達していたことへの賞賛に他ならない。

こうした評価をふまえれば、これまでのヴァレーズ研究がもっぱら作品の音響構造の解析に集中してきたのも当然といえる。12音構造という視点から作品のアプローチを試みる Stempel (1979) や、《イオニザシオン》における音色の機能について論じた Chou (1980)、そしてピッチクラス理論を応用しながらヴァレーズ作品の音響について包括的に論じた Bernard (1987)、空間性という点から分析を進める De la Motte-Haber (1993) などは、この代表的な例である。

しかしながら、本研究はヴァレーズの音楽活動を、多くの亡命者たちが思想や文化の最先端領域を形成していた両大戦間期のアメリカ、とりわけ1920年代から30年代のニューヨークという背景との共振関係からとらえようとするものである。建国以来、最もアメリカの知性が「左傾化」したこの時期にあつて、ヴァレーズ自身の音楽活動も社会主義的な性格を必然

的に帯びることになった。ニュー・シンフォニー・オーケストラや ICG（国際作曲家連盟）などの団体設立はもちろんのこと、その作曲活動においても、ヴァレーズが芸術の革新と社会の革新を重ね合わせながら筆を進めていった可能性はきわめて高い。

本稿は、この仮説を検証するための第一段階として、両大戦間におけるヴァレーズの活動、さらにはその周囲にあらわれる人脈を整理することを目的としている。記述の順序としては、まず1915年以降のヴァレーズの音楽活動を年代順に整理した上で、アメリカの当時の知的状況を概観し、さらにヴァレーズ周辺の左翼人脈を抽出する。最後に、これらの結果を振り返りつつ、今後の研究の展望を記す。

1) ニューヨーク時代のヴァレーズ

本章では、我々の論点に関わる部分にいくぶんの焦点をあてながら、ヴァレーズの1915年から40年までの活動を年表風に整理してみたい¹⁾。中心となるのは、新作の作曲・初演、団体の設立、そして交友関係である²⁾。

・1915年：1915年12月29日、わずか90ドルの所持金とともにニューヨークに到着。当時32歳だったヴァレーズは、ほとんど英語を話すことができなかった。

・1916年：唯一の知己カール・ムックの紹介で、写譜や編曲、およびレッスンの仕事に従事するようになる。当時の住居は西88丁目。ちなみに米国に移住後の彼は1920年代に入るまで全く作曲をしていない。おそらくはアメリカにおける経済的基盤を確立することで精一杯であったためと考えられる。また、この時期にマルセル・デュシャンと知り合い、彼の紹介でアレンズバーグのサロンに出入りするようになる³⁾。

・1917年：4月1日、ベルリオーズの《レクイエム》を指揮して、ニューヨーク音楽界にデビューする。会場は5千人収容可能なヒッポドローム。「全ての国の戦死者たち」に捧げられたこの演奏会は大きな評判を呼び、各紙で絶賛された。演奏会の5日後、アメリカは第一次世界大戦に参戦。

・1918年：3月17日、シンシナティにおいて、シンシナティ交響楽団を指揮。プログラムはワーグナー、ビゼー、ヴェルディ、ボロディン、サティ、シャルパンティエ、ドビュッシー、デュカス。またこの年、後にICGなどの共同設立者となるハーピスト、カルロス・サルゼードに出会う。彼はヴァレーズと同じくフランスからアメリカに移住（後に市民権取得）した音楽家であった。

・1919年：「ニュー・シンフォニー・オーケストラ」を創設。この団体はメンバー全員が均等に利益を配分する協同組合的な理念を掲げており、演奏曲目は現代作品か、あるいは古典であってもニューヨークの他の2つのオーケストラが演奏しないようなものに限られていた。最初の演奏会は4月11日にカーネギーホールで行なわれたが、団体はこの一回で解散す

る⁴⁾。

- ・1920年：渡米後の初作品となる《アメリカ》に着手。
- ・1921年：《アメリカ》初稿完成。チリの詩人ウイドプロ、メキシコの詩人タブラダの詩を用いた《オフランド》を4月に初演。5月、ルイス・ノートンと結婚。5月31日、サルゼードと共にICG（国際作曲家組合）設立。ヴァレーズはマニフェストの文章の中で次のように述べている。

「(前略) 彼らはお互いに結びつきながら、公正かつ自由な作品の発表という、各個人の権利のために戦うことの必要性を認めました。このような種々の理由によって、ICG（国際作曲家組合）は産まれたのです。ICGの目的は、今日の芸術作品を知的でよく考えられたプログラムに組み上げ、そして真摯な歌手や演奏家たちの協力のもとに、作品の真の精神が明らかになるような形で聴き手に送り届けることです。そしてICGはあらゆる制限に従うことを拒否します。ICGは全ての〈イズム〉を否認し、流派の存在を否定します。単に個人だけを認識するのです」(Ouellett1966:66)。

- ・1922年：2月19日、グリニッチ・ヴィレージ劇場でICGの最初の演奏会が行なわれる。冬にはベルリンに赴き、「ICGドイツ」をブゾーニと共に設立。11月1日に初演奏会。このときにはブゾーニやヒンデミット、ルーリエ作品などに並んでヴァレーズの《オフランド》が演奏されている。また、ヴァレーズはモスクワの音楽家たちとも提携をすすめていたという(Chou1966b:8)。同年《ハイパープリズム》作曲。

- ・1923年：ICG演奏会にて3月4日、ヴァレーズ指揮で《ハイパープリズム》初演。《オクタンドル》作曲。イタリアでカゼッラやマリピエロが設立した「現代音楽協会」とICGが提携。

- ・1924年：ICG演奏会にて1月13日《オクタンドル》初演。パリとロンドンを訪問。この際にグーセンス指揮による《ハイパープリズム》がBBCで放送される。その際の批評は「4分間の雑音創作」「音楽のボルシェヴィズム」「ライオンのうなり声」といったものであった(Ouellett1966:79)⁵⁾。

- ・1925年：3月1日、ストコフスキーとフィラデルフィア管弦楽団のメンバーによって《アンテグラル》初演。メキシコで《オクタンドル》が演奏される。11月25日、グリニッチ・ヴィレージのサリヴァン通りにある住居を購入。ロシアの詩人マヤコフスキーがヴァレーズ宅を来訪。

- ・1926年：4月9日、フィラデルフィアにてストコフスキーの指揮で《アメリカ》第二稿初演。初稿は演奏されていなかったため、これが《アメリカ》初演となった。

- ・1927年：4月8日、《アルカナ》初演。ヴァレーズ夫妻はこの夏をフランスで過ごした後、10月にニューヨーク帰還。アメリカの市民権を得る。11月7日にICGの解散を宣言。「アメリカ・ソ連文化交流協会」の会長に就任。

- ・1928年4月、カウエル、チャベスと共に「パン・アメリカン作曲家協会」を設立。協会の

専属指揮者としてスロニムスキーが就任。ヴァレーズ夫妻はこの年からおよそ5年にわたってパリに拠点をおき、アルトー、カルダー、ヴィラ・ロボス、ミロ、デスノス、ルツソロ、アストゥリアス、ウイドブロ、カルペンティエール、ウンガレッティ、ルーリエなどの芸術家と親しく交際し、さらにはヘンリー・ミラー、アナイス・ニンとも知己を得た⁹⁾。また、この頃から《アストロノム》に着手。結局未完におわったこの作品では、妻のルイス、アルトー、カルペンティエール、デスノスといった人々のテキストが用いられる予定だった。

・1929年：5月30日、パリで《アメリカ》を演奏。《エスパーズ》の着想を得る。アメリカで大恐慌勃発。

・1930年：3月14日、ヴァレーズ自身の指揮により《オクタンドル》《オフランド》をプレイエル社のビル内にあるサル・ショパンで演奏（ヴィラ・ロボスも同じ日の演奏会で自作を振った）。アンドレ・ジョリヴェに作曲のレッスンを施す。パリで未来の機械化社会と芸術に関するラウンドテーブルに参加。他の参加者はリブモン＝デセーニュ、ウイドブロ、ウンガレッティ、カルペンティエール、デスノス、ルーリエ。

・1931年6月、サル・ガヴォにおけるパン・アメリカン作曲家協会主催の演奏会で、スロニムスキーが《アンテグラル》を含むヴァレーズ作品を演奏。

・1932年：2月25日、スロニムスキー指揮パリ交響楽団が《アルカナ》をサル・プレイエルで演奏。

・1933年：3月6日、パン・アメリカン作曲家協会の演奏会で《イオニザシオン》初演。4月にはキューバのハヴァナでも演奏。また、画家のディエゴ・リヴェラに招待されて、リヴェラと妻フリーダ・カーロが住む邸宅に短期間滞在し、その後ニューヨークに帰還した。アメリカではニューディール政策施行。

・1934年：4月15日、パン・アメリカン作曲家協会の演奏会で《エクアトリアル》初演。テキストはミゲル・アングエル・アストゥリアスが編集した『グアテマラの伝説』。

・1935年：この年には、おそらくヴァレーズ作品は全く演奏されていない。また、この前後の期間、ヴァレーズは深刻な鬱状態に悩まされていた。

・1936年：2月16日、《比重21・5》がニューヨークで初演される。この後、戦後の47年まで新作の発表はない。6月からサンタフェですごす。サンタフェでスペイン市民戦争の援助団体を結成。11月にニューヨークに戻る。

・1937年：ニューヨークに滞在していたマルローと共同で、合唱とオーケストラのための《エスパーズ》の構想を練る。この作品は一時期「大衆のための交響曲」と名づけられていた。一方、ニューヨーク・タイムズはこの計画中の作品を「赤の交響曲」「革命の交響曲」と呼んでいる（Clayson2002：138）。鬱状態をほぼ克服した後、8月からサンタフェで「現在も生きている音楽」と題した管弦楽法の講座を開く。また、合唱団スコラ・カントゥルムを結成するも、数回のリハーサル後に解散。この年の後半から翌年の前半はサンフランシスコ近郊ですごす。

・1938年：2月15日、サンフランシスコで《オフランド》を含む演奏会。この年の夏からロサンジェルスへ赴き、40年の秋まで滞在。急病に倒れ（病名は不明）手術を行なう。2ヶ月の療養。

・1939年：ロサンジェルス滞在。南カリフォルニア大学に招かれて講演を行なう。第二次世界大戦勃発。

・1940年：10月、ニューヨークへ戻る。

以上がヴァレーズの1915年から40年にいたるおおまかな活動の様相である。

まず指摘できるのは、ヴァレーズがこの26年の間に《アメリカ》《オフランド》《ハイパー・プリズム》《オクタンドル》《アンテグラル》《アルカナ》《イオニザシオン》《エクアトリアル》《比重21・5》の9作品しか発表していないことであろう。

そもそも《アメリカ》と《アルカナ》を除けば、ほかの7曲は全て、演奏時間が10分程度の小規模な室内楽作品であること、そしてパーマネントな形では教授職に就いていないことを考えれば、ヴァレーズがいかに寡作であったかがわかる。

しかし一方で、彼は驚くほど多くの団体の設立に関わっている⁷⁾。作曲家が複数の利益団体に属しているのはごく一般的にみられることだが、ヴァレーズのように生涯にわたって団体を設立し続けた例は珍しい。彼の設立した団体の性格を大きく3つに分類すれば、以下のようになろう。

a) 作曲家としての利益団体：ICG、パン・アメリカン作曲家協会など

b) 指揮者として関わった演奏団体：ニュー・シンフォニー・オーケストラ、スコラ・カントゥルムなど

c) 文化交流あるいは社会運動のための団体：アメリカ・ソ連文化交流協会、スペイン市民戦争援助団体（正式名称は不明）など

こうした団体の設立、そして短期間の解散はヴァレーズの音楽活動を著しく特徴づけるものの一つといえる。

2) 両大戦間のアメリカにおける社会主義

本章では、いったんヴァレーズの活動から離れ、当時のアメリカの知的状況を概観する。

第二次大戦後の冷戦期を長く体験した我々にとって、アメリカ合衆国は、社会主義や共産主義からは最も遠いところに位置する国家である。実際、とりわけ1950年代以降のアメリカにおいて共産主義が厳しい取締りの対象となっていることはよく知られている⁸⁾。

しかし、本稿の冒頭でも述べたように、アメリカの左傾化が最も進んだ時代である両大戦間期においては、社会党や共産党が様々な分裂・統合を繰り返しながらも一定の勢力を保持し、活発に運動を展開していた。とりわけ亡命知識人たちを中心とする知的・芸術的なサークルに

においては、急進的な社会主義・共産主義信奉者は決して珍しくなかったのである。

以下、先のヴァレーズの音楽活動の背景となる両大戦間の社会主義をめぐる状況について、「(a) 第一次大戦前の労働運動」「(b) ロシア革命とアメリカ共産党の成立」「(c) ニューディール期から第二次大戦まで」の3つに区分した上で記すことにする。

a) 第一次大戦前の労働運動

アメリカの社会主義を考える場合、まずその源流となるのが南北戦争以後から連綿と続く労働運動の流れである。ここでは20世紀初頭からの状況を、ニューヨークを中心にして概観する。

まず世紀初頭の労働運動史において重要なのは、19世紀末から大量に移住してきたロシアや、東欧からのユダヤ人たちによる運動である。ロシアのツァーリズムや厳しいポグロムに耐えかねて、また急速な都市化の中からはじき出されるようにしてニューヨークへと移住してきた彼らは、主に低賃金の縫製工場などに職を求めた(野村1995:41)。やがて厳しい労働条件に抗するために種々の組合が生まれることになるが、その代表的なものとしては1900年に結成されたILGWU(国際夫人服労働組合)、UCHCMU(統一帽子工労働組合)をあげることができる。

当時、各種組合を総括する組織として存在していたのは、1886年に設立されたAFL(アメリカ労働総同盟)であった。AFLはサミュエル・ゴンパーズの指導のもとで隆盛を誇っていたものの、職能別組合の同盟という性格から非熟練労働者や黒人労働者を排斥しており、この点においては外部からの批判も大きかった(後の1938年にCIO「産業別労働組合会議」が独立)。

一方、1905年に設立されたIWW(世界産業労働者同盟)は、不熟練労働者までをも対象にした急進的な団体である。1908年の規約前文に「労働者階級と雇主階級はなんら共通のものをもたない。何百万という労働民衆の間に飢餓と欠乏がみいだされ、雇主階級を構成する少数の者たちが生活のあらゆる良きものをもっているかぎり、平和はありえない」(大下1989:146)とうたっていることから分かるように、従来の団体に比べると、はるかに戦闘的・共産主義的な姿勢を特徴としていた。

1910年代を過ぎると、様々な労働運動は目に見えて勢いを増し、各地で大規模なストライキが組織されるようになる。また、より重要なのは、組合の構成員が1901年に社会主義労働党から分裂して発足した社会党の支持層として、アメリカ政治全体に大きな影響力を発揮しはじめることである。この勢いは社会党の会員数の推移からも明らかで「1901年の約1万人から、1904年には2万人を超え、1908年に4万人以上となり、1912年には11万8千人となった。以後、漸減するが、1917年には8万人、1919年には約11万人だった」(野村1995:215)。

こうした背景の中、アメリカ社会党の創設者の一人であるユージン・デブズは、1904年に出馬した大統領選挙で40万票を獲得、さらに1912年には90万票を獲得し、全米を震撼させた。ち

なみに彼は1918年にスパイ防止法違反で逮捕されたために、1920年の選挙は獄中から出馬することになったが、この際にも94万票を獲得している。

総じて言えば、第一次大戦前の時期は、各地で起こった労働運動のうねりが次々に融合・離反を繰り返しながらも巨大化する過程として捉えることができよう。この流れは、続く時代に入ると、ロシア革命などの衝撃を経て、社会主義・共産主義思想とさらに強くリンクするようになる。

b) ロシア革命とアメリカ共産党の成立

第一次大戦末期の1917年、ロシアで共産主義革命が勃発。革命を間近で取材したアメリカのジャーナリスト、ジョン・リードは、この体験を『世界をゆるがした10日間』と題したルポルタージュに著して一躍名を知られるようになった。実はもともとリードは1911年から左翼雑誌「マッセズ（大衆）」の編集者を務めており、既に1913年から14年にかけてメキシコ革命の取材にも赴いていた。彼はその後、モスクワの革命政府と密接な関係を保持しながら、アメリカ共産党の創設において中心的な役割を果たすことになる。

帝政ロシアが革命によって倒れたというニュースは、アメリカの社会主義者・共産主義者を強く刺激した。かくして1919年には社会党から離脱したメンバーによって、リードらが中心になった共産主義労働党、そしてフレイナらが中心となったアメリカ共産党が誕生。活動方針の調整が失敗したために、相次いで二つの共産党が生まれてしてしまったわけだが、モスクワのコミンテルン（第三インターナショナル）は、こうした分裂状態に対して厳しい態度をとり、二つの政党を統一することをコミンテルン加入の条件として提示する。こうして1921年、ついに共産党と共産主義労働党が連合して、統一アメリカ共産党は結成された。

しかし、社会主義・共産主義勢力が無視できない力を持つにつれて、保守派からの巻き返しも勢いを増すことになる。第一次大戦中にはウィルソン政権によって、防諜法や治安法が導入され、先にも述べたユージン・デブズをはじめとする様々な社会主義者たちが2000人以上も起訴されていたが、さらに1919年から1920年の初頭にかけてはより過激な「赤狩り」がミッチェル・パーマー司法長官、フーバー局長によって行なわれ、4000人以上が投獄されることになったのだった。

こうした状況の中でアメリカ共産党は表立った活動は出来ず、合法的に活動を進める労働党との連携による政治活動を余儀なくされる。ようやく1923年に労働者党と統一し合法化されたものの、皮肉にも空前の好景氣を迎えつつあった20年代のアメリカにおいては、共産党の活動および労働運動は、必然的に沈滞化せざるを得なかった。先にも触れたIWWの場合も、20年代後半にはほとんど活動が成立しなくなってしまうのである。

一方でこの時期、第一次大戦を契機にして渡米した、多くのヨーロッパ知識人たちからの刺激によって、社会主義・共産主義はアメリカの知的階級に深く根を下ろすことにもなった。先にもふれた雑誌「マッセズ」は1927年に「ニュー・マッセズ」として再創刊され、この後30年

代前半にかけて、アメリカの左翼人脈の一つの拠点として機能するようになる。もはやアメリカの知識人たちの「左傾化」は、誰の目にも明らかになっていた。左翼的な文学雑誌、演劇団体、舞踊団体、その他の文化団体の数や勢力が突然増えたことは、党の指導者にとっても大きなおどろきだったという（ハウ1979：160）。

すなわち、1920年代後半を一つの境にして、アメリカにおける社会主義・共産主義の浸透は、底辺労働者の待遇改善を前提とした労働運動経由から、知識人を經由しての思想的な色彩が濃いものへと、徐々にではあるが変化を遂げるのである。

20年代後半の大量消費社会を謳歌する中で、国民の約5人に一人が自動車を所有するという好景気に沸いたアメリカは、しかし同年10月24日の大恐慌によって一時的に全てを失う。もっとも社会主義者たちにとっては、この恐慌はむしろチャンスでもあった。

c) ニューディールとトロツキズムへの転換

大恐慌後、大統領フーヴァーの政策はことごとく民衆から反発を受け、1932年の選挙では惨敗を喫した。代わって大統領に就任したローズヴェルトは、いわゆるニューディール政策によって経済の復興を図ることになる。よく知られているようにこの政策は、連邦政府が強力な権限を発揮して諸産業を管理する点において、きわめて社会主義的な側面を持っている。33年に発動されたNIRA（全国産業復興法）、AAA（農業調整法）、そしてTVA（テネシー川流域公社）による総合開発などはいずれも非アメリカ的な政策といつてよいが、より注目しなければならないのは、これらの政策に付随して、労働者の権利擁護が飛躍的に進められたことである。

例えばNIRAの第7条a項によって、団体交渉権が保証されたことはその代表的な例である（有賀2002：162）。35年3月にNIRAが違憲判決をうけた際、この条項も失効したが、すかさず同年にはワグナー法（全国労働関係法）が成立して、労働者の権利はより強力に守られることになった。つまり未曾有の不況から脱する過程においては、政府の政策が組合側の利害と一致したわけである。

ローズヴェルトはさらに1935年からの第二次ニューディールにおいて社会保障制度を導入し、企業の組合活動を支持する政策をとる。このために1936年の大統領選挙では、衣服関係の諸労組がローズヴェルト支持を掲げるといふ、以前には決してあり得なかった状況がアメリカに出来ることになったのだった。逆にいえば、こうした状況の中で労働運動は、かつての急進的・社会主義的な性格を徐々に喪失し、アメリカ社会の中に独自の形で「健全な」位置を占めはじめるのである。

一方、奇しくも知識人たちによる社会主義思想も、この30年代半ば頃に大きな転換——共産党からトロツキズムへの転換——を遂げることになる。もちろん、この変化は一気に生じたものではなかったし、依然としてコミンテルンの教条的な方針を遵守する党员も多かったが、知識人たちの大勢は明らかだった。

例えば、1934年に創刊されたジョン・リード・クラブの機関紙「パーティザン・レビュー」は、左翼知識人の動向を知る上で最も重要なものであるが、早くも36年にはスターリニズムとトロツキズムの狭間で勃発した様々な抗争が原因で休刊を余儀なくされる。しかし37年に再刊された際には、明確に反スターリン主義を基盤としたマルクス主義をうたうようになっていた¹⁰⁾。また、1936年には、アメリカ知識人たちの間に「トロツキー擁護委員会」が発足し、スターリン政権に追われて亡命を続けるトロツキーのメキシコ移住に一定の役割を果たすことになる。

こうした転換の原因は、1933年にナチスが政権をとったことによって、新たに大量のユダヤ系知識人がアメリカに流入してきたこと、1936年の第一次モスクワ裁判の悲惨な様相が伝えられたこと、そしてスペイン市民戦争をめぐるソ連政府の対応などに求めることができるだろう。

以上、本章ではアメリカの両大戦間の状況を左翼思想の面から概観した。まさにヴァレーズはこうした背景の中で音楽活動を行っていたわけであるが、次章ではこの時代にヴァレーズと共に芸術活動を行っていた左翼芸術家たちに焦点をあててみたい。

3) ヴァレーズをめぐる左翼芸術家の人脈

本章では、ヴァレーズがアメリカ時代に関わった芸術家たちについて考察を加える。

前章でみたような「知識人の左傾化」が顕著になっていた当時のアメリカにおいて、彼らの多くも何らかの形でマルクス主義との接点を持ちながら創作を行っていた。もちろん友人・知人とヴァレーズの思想を混同するわけにはいかないが、彼らの活動の交差する点に、ヴァレーズの思考もおのずと炙り出されてくることになるだろう。

ところで、ヴァレーズの左翼人脈に関して最初に記しておかないといけないのは、彼が渡米以前にレーニンとトロツキーに出会っていることである。

パリ時代のヴァレーズはロシア人亡命者のグループと頻繁に接しており、1909年あるいは1910年、そこでレーニンと顔を合わせているという (Varèse1972:102)。また、1915年にはベルリンでトロツキーに会っている (Ouellet1966:42)。これらの会合の目的や様子については明らかになっていないが、後に妻となったルイスは、ヴァレーズが革命の理想に興味を示しており、さらにはロシア人をひどく好んでいたと述懐している (Varèse1972:102)。そこでどのような会話が交わされたのかは不明ながらも、20世紀の社会主義運動に最も強い影響を与えた二人のロシア人に直接接したことは、おそらくヴァレーズにとっても印象的な体験であったに違いない。

本章では以下、第1章に登場した人名から、重要と思われる8人の人物を年譜の登場順にピックアップし、その経歴とヴァレーズとのかかわりを概観する。

①ウラディミール・マヤコフスキイ Vladimir Vladimirovich Mayakovskii 1893～1930

ロシアの詩人。革命以前からいくつかの政党に属して政治活動を行い、数度の投獄を経験した。1908年、ロシア社会民主労働党に入党した頃から詩作を始め、1917年の革命以後は、時事詩や戯曲、そしてプロパガンダのポスター制作などによって党に貢献する。1922年末、ロトチェンコ、トレチャコフなどと共に芸術集団「芸術左翼戦線（レフ）」を結成。この団体はロシア・アヴァンギャルド、とりわけロシア未来派の母体としてロシア芸術史に大きな貢献を成したものの、ロシア・プロレタリア作家協会（ラップ）から政治的攻撃を受け、25年には活動を休止。マヤコフスキイはこの中でヨーロッパをたびたび訪問し、さらにはレフが終焉を迎える1925年にメキシコ、アメリカに渡った。その後、スターリニズムが台頭する中での政治的軋轢と個人的な恋愛の破綻によって、1930年にモスクワで自殺を遂げている。

ヴァレーズはマヤコフスキイと1925年末に会合を持っている。この年の11月、ヴァレーズはグリニッチ・ヴィレッジのサリヴァン通りに小さな家を購入するが、訪米したマヤコフスキイは早速ここを訪れているのである（Clayson2002：94）。どういった経緯でこの訪問が実現したのかについては明らかではないが、他にもこの時期には神秘主義者として知られるグルジェフがパリへの移動途中にヴァレーズ邸を訪れており、ヴァレーズのもつロシア人脈の深さが伺える。

②カルロス・チャベス Carlos Chavez 1899～1978

メキシコの作曲家。インディオの血を受け継いでメキシコシティに生まれ、幼い頃からインディオ文化に接して育った。11歳の年にメキシコ革命が勃発。長い激動の時期を経た後、1920年にオブレゴン政権がスペイン統治以前のインディオ文化を奨励するようになると、チャベスの音楽作品はリヴェラなどによる壁画と共に、新しい革命政府を代表するものとして評価されるようになった。1922年にはヨーロッパに1年間滞在し、その後26年9月から28年6月までニューヨークに住み、ICGの活動に参加した。1928年からはメキシコ音楽家ユニオンの設立によるメキシコ交響楽団の音楽監督、さらにメキシコ国立音楽院の院長に就任。さらに33年には文部省の芸術局長をつとめるなど、メキシコ音楽界の要職をほとんど歴任した。

ヴァレーズとチャベスが最初に出合ったのは、おそらく26年の早い時期であったと推定されるが、チャベスは既に1925年12月18日、メキシコ国立高等学校のリヴェラの壁画下でヴァレーズの《オクタンドル》を指揮していた（Oulette1966：80）。ヴァレーズの音楽を訪米以前から高く評価していたことを考えれば、チャベスが26年にニューヨークに向かった理由の一つが、ヴァレーズの存在にあったと想像することも可能であろう。いずれにしても、マルクス主義者にして、新しいメキシコ政府と密接な関係を保っていたチャベスとの出会いは、ヴァレーズにとってはきわめて重要なものであった。1928年、ヴァレーズとチャベスは「パン・アメリカン作曲家協会」を設立。ヴァレーズは設立時のマニフェストの中で、新古典主義に毒されているヨーロッパの作曲家たちに対抗してこの団体を設立したと述べているが（clayson2002：119）、

そもそも「パン・アメリカン」という発想が、チャベスなしに生まれることはあり得なかっただろう。また、この後チャベスを通じて、ヴァレーズはラテン・アメリカの芸術家たちと関係を保持することになる。

③アントナン・アルトー Antonin Artaud 1896～1948

フランスの詩人・劇作家。マルセイユに生まれ、1920年からパリで活動。24年にブルトンらのシュルレアリスム運動に参加。その後はグループの中心で活動を続けながら、俳優として映画・演劇に出演した。しかし、急速に共産党に接近するブルトンらとは対照的に、政治運動に対しては否定的な態度を保持したため、26年の12月、アルトーはシュルレアリストのグループから除名されてしまう。その後、演劇の分野で多くの実験を成すものの、若い頃からの麻薬中毒が徐々に深刻化し、治療のために入退院を繰り返すようになった。1936年にはメキシコを訪れ、シュルレアリストを非難すると共にマルクス主義からの離脱を唱える講演を行なった。1940年からはおよそ8年間におよぶ入院生活の末、この世を去った。

ヴァレーズは1932年10月、自らが計画していた《アストロノム》の台本をアルトーに依頼している。この作品はもともとデスノスとカルペンティエール、そして妻のルイスがテキストを提供する予定だったのだが、どういう訳か最終的にはアルトー一人が共同制作者となったようである（バーバー1993：86）。1933年以降、ヴァレーズはしばしばアルトーに台本を催促したが、アルトーの仕事は体調不良のせいもあって捗らなかった。ようやく1934年に台本の前半部を送付するものの、この頃には逆にヴァレーズが抑鬱症に悩まされており、結局、このコラボレーションはうまくいかないままに中断してしまった。ちなみに、本章でとりあげた8人の内、このアルトーのみが明確な反マルクス主義を掲げている。

ちなみに、ヴァレーズと直接の交友関係はなかったようだが、シュルレアリスム運動の中心人物であったアンドレ・ブルトンの動向についても、ここで触れておきたい。ヴァレーズがパリへと一時的に拠点を移したのは1928年だが、実はこの時期はシュルレアリスムの運動が共産党からトロツキズムへと急転換を図る最中であった。ブルトンは1925年のモロッコ紛争を契機にして共産党に接近し、1927年にはアラゴンやペレとともに共産党に入党するが、1930年の「シュルレアリスム第二宣言」において党を激しく批判。公然とトロツキー支持を打ち出すようになり、33年にはフランス共産党から除名される。ブルトンはその後、1938年にメキシコのトロツキーを訪問し、リヴェラ邸に滞在。39年には独立革命芸術国際同盟（FIAR）機関誌『鍵』を創刊するなど、トロツキストとして活動を続けた。

ブルトンの軌跡は多くのシュルレアリストたち、そして左翼知識人たちと多くの共通点を持っており、当時の知的背景を考える上で重要なものである。

④ミゲル・アンヘル・アストゥリアス Miguel Angel Asturias 1899～1974

グアテマラの小説家。幼い頃に農場でインディオの家族とすごし、マヤの神話や伝説の世界

に親しんだ。グアテマラ国立大学医学部、法学部に進んだ後、大学時代には軍事独裁政権に対する反対運動によって数度投獄される。1923年にイギリスを経てパリに到着、ここでシュルレアリスムの運動に触れ、強い影響を受ける。マヤの伝説を採集した「グアテマラ伝説集」が高く評価された後の1933年、グアテマラに帰国。後にノーベル文学賞を受賞した。

ヴァレーズはパリに拠点を移した1928年、アストゥリアスを含む、多くの芸術家の知己を得ている。常に神秘的・原始的なテキストを探していたヴァレーズは、アストゥリアスの編集による『グアテマラ伝説集』に出会い、すぐさま、構想中の《エクアトリアル》のテキストに用いることを決定した。しかも、パリで手に入れたフランス語版ではなく、原典のスペイン語版を用いている点に、ヴァレーズのこだわりが感じられる。

⑤アレホ・カルペンティエル Alejo Carpentier 1904～80

キューバの小説家。ハバナ大学で建築と音楽を学んだ後、1927年にマチャド政権の圧制に抵抗して投獄され、翌年パリに亡命。この間にブルトンなどのシュルレアリストたちと親しく交際した。西洋合理主義の理解をこえる「驚異的現実」こそラテン・アメリカ特有の現実であるとの信念のもとに、『この世の王国』をはじめとする作品を次々に発表、アストゥリアスとともに「魔術的リアリズム」の創始者とされる。その後、1959年のキューバ革命を機にして帰国し、国立出版局長などの要職に就いた。

ヴァレーズは、1928年からパリでカルペンティエルと親しく交際するようになり、1930年には共に「未来の音楽の機械化」に関するラウンド・テーブルに出席している。また、先にも述べたように、『アストロノム』の台本には、もともとはカルペンティエルとデスノスのものが使用される予定であった。

⑥アンドレ・マルロー Andre Malraux 1901～76

フランスの小説家・政治家。パリで教育を受けた後、1923年にフランス領インドシナにクメール文化遺産の調査におもむく。同地では民族独立運動を支援し、27年までインドシナにとどまった。1936年のスペイン市民戦争では、共和政府側の国際義勇軍飛行隊パイロットを務め、この経験から『希望』(1937)を発表。第2次大戦中はレジスタンス運動に身を投じ、戦後はド・ゴール政権の情報相・文化相として意欲的に活動した。また、晩年は日本に傾倒し、海外への日本文化の紹介に務めたことでも知られる。

ヴァレーズとマルローが出会ったのは、1937年の3月である。当時、新進作家として目覚しい活躍を遂げ、スペインでの義勇軍体験を終えたばかりのマルローは、スペイン共和国政府の宣伝および対外交流の私設行使としてアメリカを訪問した。ヴァレーズは、当時執筆中であった『希望』の草稿をたずさえてグリニッチ・ヴィレッジに現われたマルローと意気投合し、共同作《エスパーヌ》の構想を練ることになる。第1章でも触れたように、この作品は当時「赤の交響曲」「革命の交響曲」と新聞から揶揄され、さらには「共産主義者の心情を反映するも

の」といった報道までが成されていた。実際、マルローとヴァレーズは、作品終楽章の合唱にロシア人や黒人を入れることを計画していたという (Ouellet1966:133)。

⑦ヘンリー・ミラー Henry Miller 1891～1980

アメリカの作家。ニューヨーク市に生まれ、様々な職に就いた後、1930年にパリへと渡る。この都市での私的な体験を『北回帰線』(1934)をはじめとする自伝的小説にあらわして評判となるが、アメリカ本国では猥褻との理由で発禁処分を受けた。1940年、アメリカに帰国してからはカリフォルニア州に定住し、当時のアメリカ文明と道徳観を批判する数々の作品を発表する。

ヴァレーズが最初にミラーに出会ったのは1928年、ミラーが一時的にパリを訪問した際であるようだ (Clayson2002:122)。ただし、彼らが親密に交際するのは、1941年にミラーがニューヨークを訪問してからである。1945年にミラーが発表したエッセイ『冷房装置の悪夢』の中には「ゴビ砂漠のエドガー・ヴァレーズと共に」と題された一節が含まれているが、ここではヴァレーズが、準備中の新作について次のように述べていたことを明らかにしている。「避けるべき点——宣伝調、そして、それと同様に時局むきの出来事や主義についてのジャーナリスティックな思惑。いまの時代のマンネリズムや俗物根性を剥ぎ取って、この時代の凝縮せる叙事詩を書きたい。ところどころにアメリカ、フランス、ロシア、中国、スペイン、ドイツなどの革命からとった語句を用いたほうがいい。(中略) もっとも原始的なものから科学の最先端にいたるまで人間に関するものいっさいを包容したいのだ」(ミラー1945:168)。また、同様にミラーはこのエッセイの中でヴァレーズから合唱用の歌詞を依頼されたことを記している。ヴァレーズは「ゴビ砂漠の感じ、なにかそういったものがほしい」という注文をつけたというが、結局ミラーは歌詞を完成させることができず、その代わりに先のエッセイをヴァレーズにささげることになった (ミラー1945:176)。

⑧ディエゴ・リヴェラ Diego Rivera 1886～1957

メキシコの画家。母国で基礎的な教育を受けた後、1907年からマドリード、続いてパリに滞在し、キュビズムの影響を受ける。1921年、帰国とともにメキシコ共産党に入党し、党と政府が推進する壁画運動の中心人物となった。メキシコ国立高等学校(チャベスがヴァレーズ作品の演奏を行なった場所である)やチャピング農学校、国立宮殿をはじめ、アメリカでも壁画を制作。29年、コミンテルンの方針との食い違いから共産党を脱退。1933年、ニューヨークのロックフェラー・センターの壁画を担当するものの、レーニン像を描いたために撤去された。メキシコに帰国後の1937年には、スターリンにより国外追放されたトロツキーのメキシコ亡命を、直接メキシコ大統領との交渉により実現させた¹¹⁾。

ヴァレーズがリヴェラといつ出会ったのかは不明だが、おそらくチャベスを通じて知己を得た可能性が高い。明らかになっている最初の接触は1933年の暮れである。ロックフェラーセン

ターの壁画事件を経てメキシコに戻ったリヴェラは、パリ生活の後にアメリカ帰国を迷っていたヴァレーズに、メキシコの自宅に住むように薦めたのだった。結局、ヴァレーズは数日間リヴェラ邸に滞在し、その後にニューヨークに戻ることになる。ちなみにこの数年後、リヴェラは同じようにしてトロツキーを自宅（正確には妻のフリーダ・カーロの家）に滞在させた。また、リヴェラは、1950年代にニューヨークのヴァレーズ邸を訪れている。ヴァレーズはそのときのことを次のように述懐している。「彼は死ぬ前に一度ここへ来たんです。私が《ほら、芋虫がいるよ》と言ったら、彼、どうしたと思いますか？ それを口に放り込んでたべちゃったんですよ」（ブルーメ1962：39）。

以上に観察したように、ヴァレーズをめぐる人脈をたどってゆくと、まずは反ファシズムと民族独立といったモチーフが色濃く浮かび上がってくる。ヴァレーズの周りに常に見出すことのできるラテン・アメリカ出身の芸術家たちは、そのほとんどが何らかの形で祖国を追われ、あるいは自ら出国する中で、既存政権の打倒を待望していた¹²⁾。また、1923年に黒人作曲家のウィリアム・グラント・スティルを、そして第二次大戦後には中国からアメリカに亡命した周文中を弟子にしていることも、こうした文脈の中で考えることができるだろう。

一方、1928年から始まるパリ滞在中で出会ったシュルレアリスト人脈も、ヴァレーズに大きな影響を及ぼしたと考えられる。彼らの奔放な言語実験がいかに刺激的であったかは、ヴァレーズが彼らのテキストを好んで用いていることから伺える。加えて、アルトーとブルトンの項で述べたように、20年代末から30年代初頭はパリのシュルレアリストが共産党とトロツキズムの狭間で揺れ動いた時代であり、ヴァレーズは期せずして間近からこの光景を眺めることになったのだった¹³⁾。

4) 政治的前衛と音楽的前衛の結合？

これまで両大戦間のヴァレーズをめぐる、諸状況や人脈を整理してきたが、では一体、彼自身の思想はどのようなものだったのだろうか。残された文章は、そのほとんどが作品についての、あるいは彼が設立した団体についてのオフィシャルな性格のものであり、彼の思想について直接語ってはいない¹⁴⁾。

筆者は2002年9月に、1949年以来ヴァレーズの高弟として常に行動を共にし、師の死後はその遺産を管理することになった中国系アメリカ人作曲家、周文中（Chou Wen-chung）へのインタビューを試みた。ヴァレーズの政治思想について率直に問うてみると、周は「ヴァレーズは社会主義者ではなかったと思う」と注意深く答えてくれたが、ただし同時に、マイノリティに対して強く共感を覚えていたこと（当時、「マイノリティ」という語は現在のような用語法では使われていなかったそうだが）、そしてファシズムに対する嫌悪は明らかであったとも語っていた¹⁵⁾。

実際、残された資料から判断する限り、ヴァレーズはアメリカ共産党に属したこともなければ、他の純粋な政治団体に所属したこともない。しかし、その代表作のほとんどが産み出された両大戦間において、ヴァレーズは明らかに左翼知識人の一人として見なされており、さらには自らもその位置づけに対して自覚的だった（そもそも彼が1925年以来、住居としていたニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジは、当時にあっては亡命左翼知識人を象徴する場所であった）。また、ニュー・シンフォニー・オーケストラに端を発する様々な団体の設立が、当時の労働運動の影響下にあると考えられることに加えて¹⁶⁾、自らの運動を世界的な規模へ発展させようとするインターナショナリズムなどにも、ヴァレーズの左翼性はよく現われている。

とすれば、ヴァレーズの音楽活動／作品を、狭義の政治思想に回収してしまうことは不可能ながらも、むしろそれ故に、彼の音楽活動／作品の本質においては政治的前衛と芸術的前衛が独特の形で結びついていたと想定できるのではないか。この関係性を読み解くことは、彼の芸術作品の特質のみならず、両大戦間のアメリカという特殊な磁場を明らかにすることにも繋がるだろう。

冒頭でも述べたように、本稿はヴァレーズとその思想をめぐる研究の端緒であり、ヴァレーズの音楽活動、アメリカの社会状況、ヴァレーズの人脈の一部を提示するにとどまるものであった。今後は同時代の一次資料へのアプローチをさらに深めるとともに、ヴァレーズの作品自体にも、従来とは異なった角度から分析を加えるつもりである。

(本学講師＝音楽史担当)

注 釈

- 1) 1915年以前のヴァレーズの歩みを、ごく簡単に記しておく以下のようなになる。パリに生まれ、ブルゴーニュ地方、トリノなどで少年時代を過ごした後1904年、スコラ・カントルムに入学。ルーセル、ダンディに師事。1905年にはパリ音楽院でヴィドールに学んだ。1906年、合唱団「民衆の城」を結成。1908年からベルリンに渡り、ブゾーニやR. シュトラウスの知己を得て、作品を発表し始める。その後1915年の渡米までに《ロマネスク狂詩曲》(1906)、交響詩《ブルゴーニュ》(1908)、オペラ《エディプスとスフィンクス》(1914)などを書く。ちなみに、渡米以前の作品は、《暗く深い眠り》を除いては全て火災のため原稿が焼失してしまった。
- 2) 伝記的な事実に関しては、Ouellet (1966)、Chou (1966b)、Varèse (1972)、Clayson (2002)を基盤にしつつ、他の文献も参照した。
- 3) 詩人であったW. アレンズバークをパトロンとしたこのサロンには、1915年頃からニューヨークのダダイストたちが集まりはじめた。デュシャン、ピカビア、マン・レイなどが主要なメンバーで、彼らを「ニューヨーク・ダダ」と呼ぶこともある。1921年頃に自然消滅した。
- 4) ニュー・シンフォニー・オーケストラの第一回演奏会に関しては沼野(2000)を参照のこと。
- 5) ボルシェヴィズムという語は、もともとはソヴィエト共産主義のイデオロギーをさす。ただし1920年代のドイツでは、表現主義の造形美術やグロピウスの建築などをはじめとするモダンな芸術を非難する際に、ナチスによってこの語が用いられた。おそらくヴァレーズ作品の評においては「きわめて革新的」といったほどの意味で用いられたのだろうが、当時の革新性が共産主義と結び付けられていたことは重要である。
- 6) ヴァレーズは後に、アナイス・ニンの『近親相姦の家』をテキストにした《ノクターナル》(1961, 未完)を作曲している。
- 7) ヴァレーズは渡米以前、1940年以後も数々の団体を設立している。例えばパリで組織した合唱団「民衆の城」(1906)、ニューヨークで組織した合唱団「ニュー・コーラス」(1941)、「ザ・グレイター・ニューヨーク・コーラス」(1942)など。
- 8) 第二次大戦後の1954年から基本的には非合法化。これに関しては大下(1989:206)に、条文の抜粋が掲載されている。ただし、様々な形で活動を制限されてはいるものの、現在もアメリカ共産党は存続している。
- 9) しかし一方で、1932年にフーヴァーが指示した復興金融公社(RFC)の設立は、政府の資金を銀行や鉄道に融資する点において、ニューディールの先駆けになったという評価もある。有賀(2002:150)を参照。
- 10) このあたりの事情に関しては、堀(2000)の第3章に詳しい。
- 11) 1940年8月21日、トロツキーはメキシコで暗殺された。
- 12) こうしたラテンアメリカ人脈の中では、チリ出身のフィンセント・ウイドブロ(Vicente Huidobro 1893-1948)も重要である。ウイドブロは《オフランド》にテキストを提供しており、20年代末にはヴァレーズと親しく交際している。
- 13) もっとも、アルトーの例からも分かるように、必ずしも彼らの全てが共産黨員あるいはトロツキストであったわけではない。
- 14) ヴァレーズ自身の原稿をまとめたものとしては、生誕百年の年に出版されたVarese(1983)がある。
- 15) このインタビューは2002年9月8日、グリニッチ・ヴィレッジのサリヴァン通りに位置する周文中宅で行われた。実はこの邸宅は、1925年にヴァレーズが購入し、死去するまで住んでいたその家である。作曲家である周氏はヴァレーズの死後、その資料の管財人を務めるとともに、ヴァレーズ邸を買い取ったのだ。かつてのヴァレーズの仕事部屋は現在では周氏の仕事部屋になっているが、壁にはヴァレーズが収集した様々な打楽器類がところ狭しとディスプレイされていた。
- 16) 実は、きわめて社会主義的色彩の強いこのオーケストラの設立は、周囲からも同年のアメリカ共産党の誕生と結びつけられて考えられていた(OJA2000:31)。

主要参考文献

- Bernard, Jonathan W.
1987 The music of Edgard Varese (Yale univ. Press)
- Clayson, Alan.
2002 Edgard Varèse (Sanctuary)
- Charbonnier, Georges.
1970 Entretiens avec Edgard Varese (éditions Pierre Belfond)
- Chou, Wen-chung.
1966a Varèse : a sketch of man and his music (The musical quarterly LII/2)
1966b Open rather than bounded (Perspectives of new music V/1)
1980 Ionisation : The function of timbre in its formal and temporal organization (in The New Worlds of Edgard Varese : a symposium)
- De la Motte-Haber, Helga.
1993 Die Musik von Edgard Varese (Wolke verlag)
- Jolivet, Hilda.
1973 Varèse (Hachette littérature)
- Oja, Carol J.
2000 Making music modern (Oxford Univ.Press)
- Ouellette, Fernand.
1966 Edgard Varèse (Eng. trans version, The Orion Press)
- Van Solkema, Sherman.
1980 The New Worlds of Edgard Varese : a symposium (I.S.A.M.)
- Varèse, Louise.
1972 Varese : a looking-glass diary (Eurenburg books)
- Varèse, Edgard.
1983 Ecrits (Christian Bourgois editeur)
- 秋元秀紀
2001 『ニューヨーク知識人の源流』(彩流社)
- 有賀夏紀
2002 『アメリカの20世紀(上)』(中公新書)
- 大下尚一, 有賀貞, 志屯晃佑, 平野孝 [編]
1989 『資料が語るアメリカ』(有斐閣)
- ガラント, ピエール
1971 『小説的生涯 アンドレ・マルロー』(齊藤正直訳, 早川書房)
- コーザー, ルイス
1988 『亡命知識人とアメリカ』(荒川幾男訳, 岩波書店)
- 塚原 史
2003 『ダダ・シュルレアリスムの時代』(ちくま学芸文庫)
- ハウ, アーヴィング, コーザー, ルイス
1979 『アメリカ共産主義運動史(中)』(西田勲, 井上乾一訳, 国書刊行会)
- バーバー, スティーヴン
1993 『アントナン・アルトー伝 打撃と粉碎』(内野儀訳, 白水社)
- 久田俊夫

- 1993 『アメリカ・サンジカリズムの群像』（未来社）
ブルーメ，マリー
- 1962 「エドガー・ヴァレーズ 新しい音楽の古い人」『音楽芸術11月号』
ボイヤール，モレーズ
- 1958 『アメリカ労働運動の歴史 I』（雪山慶正訳，岩波現代叢書）
堀 邦維
- 2000 『ニューヨーク知識人 ユダヤ的知性とアメリカ文化』（菜流社）
ポリティカル・アフエアズ編集部編
- 1971 『アメリカ共産党の50年』（大月書店）
沼野雄司
- 2000 「ヴァレーズはなぜバッハのコンタータ31番を選んだか？」『EXMUSICA 1号』
野村達郎
- 1995 『ユダヤ移民のニューヨーク』（山川出版社）
前川玲子
- 2003 『アメリカ知識人とラディカル・ヴィジョンの崩壊』（京都大学学術出版会）
ミラー，ヘンリー
- 1945 『冷房装置の悪夢（ヘンリー・ミラー全集9）』（大久保康雄訳，新潮社）
宮本陽一郎
- 2002 『モダンの黄昏 帝国主義の解体とポストモダニズムの生成』（研究社）
矢澤修二郎
- 1996 『アメリカ知識人の思想』（東京大学出版会）

●謝辞

本研究は、財団法人花王芸術文化財団の助成を受けている。記して感謝したい。